

# 豊後国朽網郷の切支丹新資料 (一)

—大分県直入郡久住町石田の切支丹遺跡—

佐藤 満洋

## はじめに

これまで豊後国朽網地方（大分県直入郡直入町長湯、久住町都野地方）のキリシタン遺跡については、かなり研究され半田康夫氏「豊後キリシタン遺跡」、北村清士氏「大分県の切支丹史料」などの著書や、拙稿「豊後国朽網地方のキリシタン遺跡」〔大分県社会民俗学会誌「とよ」創刊号〕として発表されたものがかなりある。

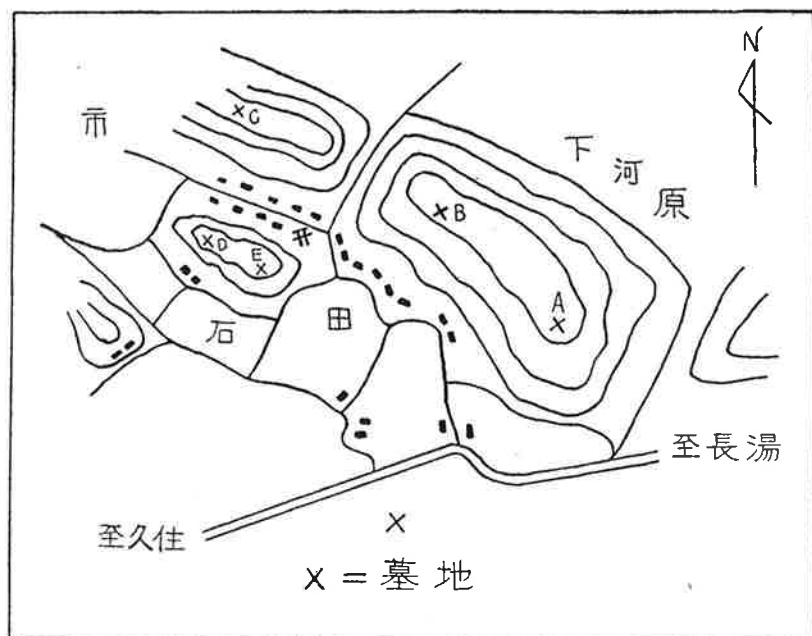
しかし筆者はこの朽網郷はわが国のキリシタン布教当初においては、平戸、府内などとともに八布地の一つに数えられていた地方である（註）。ことからこの朽網全地域にわたつてのキリシタン調査を行い、キリシタン文化の研究と、キリシタン遺跡を通して社会構造的なものの一面にふれてみたいということからキリシタン調査を行つていつているうちに、従来発表されていない新資料を多数発見することができたので、ここにその一部である久住町石田部落のキリシタン遺跡について資料紹介を試みたい。

（註）耶蘇会士日本通信（豊後編）

石田部落の墓地について

久住町都野地方が直入町長湯地方と接する位置に石田部落がある。

## 石田附近見取図(才1図)



同部落と長湯地方の下河原部落の境に、西北方から東方に走る丘陵があるが、その丘陵の南西面に石田部落がある。そして町道倉橋―市線の道路にそつて本村ができており、その西南方の水田の中と小丘の南面に民家が点在している。

また同部落のほぼ中央に唄歌会の風習を残す「かたげ市」(正式には神宝会)として有名な都処野神社(註)のお浜所(通称天神様)がある。

そして朽網全体から見ると同部落はほぼその中央に位置している。

この石田部落にキリシタン遺跡調査のため、筆者は今年(三八年)の二月十七日に行き、第一図に見るような五カ所の墓地で調査を行った。そしてA地点の墓地(房前家の墓地)を除く四カ所でキリシタン資料を発見することができた。なお、残り一カ所は時間の都合で調査できなかつたので後日をきしたい。

(註) 松岡実「神保会とかたげ市」(観光の大分県五十九号

大分県観光協会三三年一月一日)

染矢喜多男編著「地名覚書」(いずみ書房、三十七年十一



渡辺家墓地のキリシタン墓

## 渡辺家の墓地

同部落渡辺光男氏方の墓地は第一図B地点にあり、天神様から約七〜八百米の丘陵の上にある。

この墓地には仏式の墓石の間に安山岩で作ったキリシタン墓―仏式墓石の上にアンドレア十字を浮彫りしたもの(写真一)一基と、上部にやや丸味をつけたトマス墓一基がある。アンドレア十字のある墓石の大きさは縦、横五一糎、高さ一六糎の盤石の上に縦二七・五糎、横三一・五糎、高さ二二・五糎の穂石があり、頭部に厚さ一糎のアンドレ十字が浮彫りにされている。(中央の高さ二六糎)

そして正面に「正徳四辛午、九月二日、休歿」の文字が見られる。

トマス墓は純トマス墓ではなく、底辺の縦、横四〇糎、上辺の縦、横三三糎高さ一七糎で一段できており、その上に高さ四糎、縦、横二二糎の二段めが乗った感じのやや丸味のある墓石である。(写真三の頭部の四角を大きくして全体にやや丸味をつけたものを想像してもらえばよい)

## 下市墓地

天神様から約五百米の丘陵の上にある(第一図C)この墓地には仏式墓にまじって五基のキリシタン墓がある。



下市共同墓地の吾妻屋型キリシタン墓

墓石の種類および数は吾妻屋型の墓石一、伏墓二、トマス墓一、円盤型墓石一となつている。そして全部無銘で、石材は安山岩である。

吾妻屋型の墓石（写真二）は底辺の縦三四纏、横三二纏、高さ三二纏、屋根の軒部縦四四纏、横四二纏、と上部が大きくなり、その上に神社などの屋根を思わせるよう

な大きくそつた吾妻屋根が作られている。屋根の中心部の高さ三七纏、頂点からの下り棟三二纏となつている。

中心から四方に走る下棟がアンドレア十字を表わしているようである。

この墓石のすぐ横にトマス墓と伏墓が一基ずつある。トマス墓の大きさは縦四三纏、横三六纏、高さ一九纏となつている。伏墓は縦五二纏、横四八・五纏、高さ一〇纏で、その頭部がまん頭型になつている。

この三基は同墓地のほぼ中央に地頭墓や仏式墓などともに一ヶ所に集められているので、おそらく寄せ墓にされたものであろうと考えられる。

このほかに縦、横五三纏、高さ一〇纏の伏墓が一基仏式墓の間にある。



下市共同墓地の円盤型キリシタン墓

また前述の寄せ墓の近くに写真三のような円盤型の墓石がある(註)。この墓石は一部分が欠けているが、直径三五糎、高さ一五糎の円盤型で、自然石の上に伏せられている。

この種の墓石は朽網郷でこの墓石を含めて三例発見したが、これがキリシタン墓であるか否かについては直入古談四号で考察を試みた結果、キリシタン墓らしいとの一応の結論に達したので、本稿ではこれをキリシタン墓として一応あつかっておきたい。

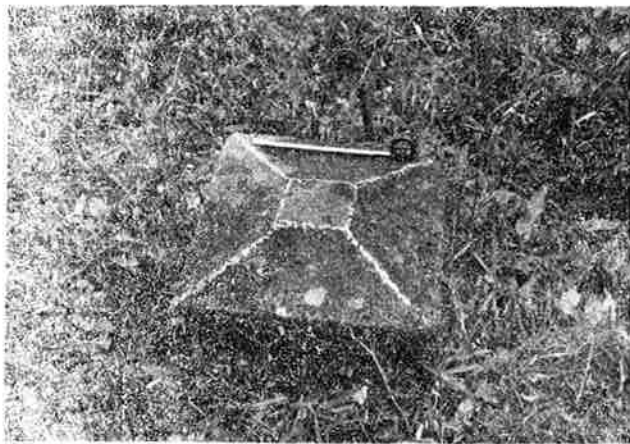
(註) 佐藤福洋「円盤型の墓石について」キリシタン墓の研究(一) (直入古談四号直入古談会)

#### 淵家墓地

石田部落本村の西南方の小丘にある。(第一凶D地点) この墓地には写真四にみるような安山岩製のかくしアンドレア十字を持つトマス墓一基と伏墓四基がある。

このかくしアンドレア十字を持つ墓石は実はトマス墓であるが、寒さのため腹部(中央)から上下に割れて上下が別々になつてゐること、土に埋もれてゐるため(土が氷つていた)正確に高さを計ることができず、高さ一八糎、縦・横四五糎と伏墓に近い数字しか得られなかつた。

中央のアンドレア十字の十字部をかくしている四角は一二糎四方で陵線の長さは二四糎となつてゐる。このように十字部をかくしてある墓石は大分鼻湯湯院町の峰先共同墓地に見ることができ(註)。しかしここのはすべて正方形



淵家墓地のかくしアンドレア十字のトマス墓

長方形、菱形のくぼみである点が本遺跡と異っている。

伏墓は四基あるが大きさは大が縦六〇糎、横五〇糎、高さ一〇糎、小は縦四六糎、横四三糎、高さ一〇糎とほぼ似た大きさである。このうち一基はかくしアンドレア十字のあるトマス墓と同様寒さのため上下に割れている。これらの墓石は全部安山岩で無銘であるが、他の仏式墓石の年号は元文、寛保、明和などが認められる。

(註) 半田康夫著「豊後キリシタン遺跡」(いずみ書房三五年二月)

#### 迫、上城、中城共同墓地

淵家墓地の東南方の小丘の端にある(第一図E地点)。この墓地には仏式墓の頭部にアンドレア十字をもつもの一基(写真五)と、トマス墓三基とがある。

アンドレア十字を持つ墓石は二重地盤の上に縦二一糎、横二四糎、高さ五〇・五糎の礎石が立っており、その頭部に厚さ二糎のアンドレア十字が浮彫りになっている。そして正面に「釈浄泉」、右面に「寛永六巳巳天、二月二二日」、左面に「俗名大久保壱岐」の文字がみられる。

この墓地の関係者の一人であり、この大久保壱岐なる人物の末孫であるという大久保貞義氏に、朽網氏の家老大久保壱岐の墓ではないかと考えているとのことであつた。

朽網氏の一重臣に熱心なキリシタン信者がいたことが那蘇会士日本通信豊後編で知ることができ、もしこの大久保



迫、上城、中城共同墓地の大久保壱岐守の墓

志岐なる人物が大久保志岐守と同一人物であるならば、前載書の裏付けができるとともに、朽網キリシタン史の一ページに、従来わからなかつた信者の名前を記すことができるのだが……。

しかしこれは大久保志岐守の歿年を諱べることによつて解明されるので、今後の調査をまちたい。

三基のトマス墓の大きさは縦四七輝、横四二輝、高さ二七輝のものが一番大きく、他の二基は多少小さくなつてゐる。

そして一基は墓地の隅に作られている寄せ墓中にありちようど石垣のように積んだ一番外側にあつたので知ることができた。この寄せ墓は大きいので、中には或はもつとキリシタン墓があるかもしれない。

## 考 察

以上、石田部落の墓地に見られるキリシタン墓を紹介してきたが、仏式墓の礎石の頭部にアンドレア十字を浮き彫りにしたものと、吾妻屋型の墓石、トマス墓の上のアンドレア十字の十字部を正方形でかくしたもの、さらに円盤型の墓石など、これまで知られていなかつたかくれキリシタン墓の新資料を発見できたことは大きな収穫だつた。

また、房前家の墓地（第一図A地点）と下市墓地（同C）、迫、上城、中城共同墓地（同E）でみられた寄せ墓のあることも見のがしてはならないものの一つであらう。

わが国の葬制の中に五〇年忌に墓をくずしたり、石塔を倒したりする風習のあることが諸先輩の研究で知られているが、前述の三カ所の寄せ墓は五〇年忌の墓倒には直接関係がなく、この地方には墓地の面積を広げることをきらう風習があるため、墓地に石塔が立ち並び埋葬場所がなくなると古い墓から順番に墓倒しを行い（ある程度まとめて）、墓地内の一カ所に墓石を寄せたり積んだりするようである。この場合骨を掘りあげたりする風習はない模様である。この古墓を整理する風習はかくれキリシタンの墓、仏徒の墓の区別はなく同じ墓地の関係者としてのあつかいをされているようである（共同墓地の場合）またこの墓倒しも古いすべての墓石を対象にするのではないことが、寛永、正徳などの年号のある墓石があることでうかがえる。

そこで、墓石にはつきり名前が彫られている場合は別として、トマス墓のように（他の無銘のキリシタン墓も同じだが）無銘のものは、墓倒しの場合、特にその対象になりやすいのではないだろうか。このことは今後も同様であろう。

しかし近年はこの地方でも火葬をする例が多くなりつつあるので、納骨堂を作る場合、まつ先にその地盤作りの石材とされるおそれのあるのがトマス墓ではないだろうか。このため現存するキリシタン墓のは握を急いで行う必要があるであろう。

前述のキリシタン墓の新資料四形式は①身分の相違からくるものか。②年代の相違か。③あるいは個人の着想か。④更にはキリスト教布教のさいに偶然に持ちこまれたものか。（例えば、宣教師の出身地、あるいは日本にくるまでの布教地の様子、さらには宣教師自身の知識となつている諸外国の様式などが雑談の中に偶然に出でくることがあり得る。特に円盤型墓石の場合はそのような気がする（註）。

これらの問題は他の遺跡の調査と古記録の調査、さらには諸外国でのキリシタン布教の様子などを比較検討することによつて究明されるであろう。

（註）佐藤満洋著「円盤型の墓石について」（直入古談四号直入古談会）

## む す び

墓地といえたいいてい、大木が生い繁つているので夏の間の風通しが悪く、管理がゆきとどかないことと、冬は陽当りが悪く、寒さがきびしいため、墓石が氷り割られたりしている例が多いが、墓地は民衆の歴史を伝える貴重な資料倉であるという意味から、管理保存の啓蒙も史学研究者には必要であることを痛感させられた。

以上で豊国朽網石田部落のキリシタン墓の紹介を終るが、調査に協力をいただいた関係者に謝意を表するとともに先輩諸氏のご批判とご教示を得たいと願つている次第である。

（三八年八月五日）